

サムエル記第一 (1)

「サムエルの家族」

1 サム 1：1～8

1. はじめに

(1) 本来は、サムエル記第一と第二は、「サムエル記」という一書である。

①七十人訳が便宜的に第一と第二に分け、その区分が定着した。

(2) 著者に関しては、3つの可能性が考えられる。

①1 サム 1：1～24：22 までサムエルが書いた可能性がある。

*1 サム 25：1 で、サムエルは死ぬ。

②サムエルのもとで学んだ預言者の1人が、まとめた可能性もある。

*その場合、サムエルが書き残した資料を利用したと思われる。

③祭司エブヤタルが、資料をまとめた可能性もある。

*ダビデと行動をとにした人物 (1 サム 22：20～23 参照)

(3) 本書の内容

①サムエル記全体は、前 1120 年頃から約 150 年間の出来事を記している。

*サムエル→サウル→ダビデ初期

②士師記の時代（混乱した時代）が約 300 年間続いた。

③国が崩壊の危機に直面したとき、神の介入があった。

④イスラエルの民が王を求めたことにより、王政が始まる。

2. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1～9 章)

A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)

1. サムエルの家族 (1：1～8)

2. ハンナの祈り (1：9～18)

3. サムエルの誕生 (1：19～28)

3. 注目すべき点

(1) 士師記の時代の末期、イスラエルは政治的にも霊的にも、混乱状態にあった。

(2) 新しい時代を導くのは、預言者サムエルである。

(3) 冒頭で、サムエル誕生の経緯が紹介される。

命題：神の御業は、取るに足りないことから始まる。

取るに足りない3つの出来事を見ると、それが分かる。

I. 無名の人エルカナ (1 節)

1. 1 節

1Sa 1:1 エフライムの山地ラマタイム出身のツフ人の一人で、その名をエルカナという人がいた。この人はエロハムの子で、エロハムはエリフの子、エリフはトフの子、トフはエフライム人ツフの子であった。

(1) ダビデ王国に至る大河の源流が記される。

(ILL) スメタナの『モルダウ』は、チェコの川を描いた交響詩。

小さな泉から水が流れ出す様子が、弦楽器と木管楽器で奏でられる。

①サムエル記も、小さな流れから始まる。

(2) エルカナの家系

①ラマタイム (二つの高地) は、ラマ (1:19) と同じ。

②エルカナは、実際はレビ人である (1 歴 6:33~38)。

*エフライムの領地に住むレビ人である。

③エルカナは「神が買い取られた」という意味。

④この家系からサムエルが出る。

⑤サムエルは、サウルとダビデに油を注ぐことになる。

(3) 教訓

①偉大な神の業は、無名の一人の人から始まる。

②神の主権の下に置かれた一人の人を軽視してはならない。

③私たちにも、神から委ねられた使命がある。

II. 不妊の女ハンナ (2~3 節)

1. 2 節

1Sa 1:2 エルカナには二人の妻がいた。一人の名はハンナといい、もう一人の名はペニンナといた。ペニンナには子がいたが、ハンナには子がいなかった。

(1) エルカナの二人の妻

①ハンナ (1 番目): 恵み、好意という意味。

②ペニンナ (2 番目): 宝石、真珠という意味。

(2) キアズム (ABBA)

①ペニンナには子どもがあった。

②ハンナには子どもがなかった。

③焦点はハンナにあり、物語の中心人物となることが示唆される。

(3) ハンナが不妊だったので、ペニンナが側室になった可能性が高い。

①聖書は、一夫多妻制を規定する（申 21：15）が、肯定はしない。

②一夫多妻制は、不和や争いの原因になる（アブラハム、ヤコブの例）。

(4) 恵まれた女に子がいないという現実をどう理解するか。

①神の働きの余地がある。

②サラ、リベカ、ラケル、マノアの妻（サムソンの母）、エリサベツ

2. 3 節

1Sa 1:3 この人は、毎年自分の町から上って行き、シロで万軍の【主】を礼拝し、いけにえを献げることにしていた。そこでは、エリの二人の息子、ホフニとピネハスが【主】の祭司をしていた。

(1) エルカナは、旧約的な意味での義人である。

①毎年、シロに上って、万軍の【主】を礼拝し、いけにえを献げていた。

②申 16：16 に巡礼祭の規定がある（年に3度）。

③当時、幕屋はシロにあった（ヨシ 18：1）。

④「上る」は、物理的に高地に行くことであるが、霊的行為も意味する。

(2) 「万軍の【主】」（יְהוָה צְבָאוֹת）は、ここで初めて出てくる。

①天の軍団の統率者。圧倒的な権威と力を持つ戦いの【主】。

②この御名は、預言書では頻繁に出てくる。

③ハンナの祈りは、万軍の【主】に向けた祈りである。

④【主】は、ハンナ個人の悩みと、イスラエル全体の問題を解決される。

(3) エリの二人の息子ホフニとピネハスが祭司として奉仕をしていた。

①彼らは、霊的に堕落していた。

(4) 教訓

①堕落した環境の中でも、個人が誠実に神を求めることは可能である。

②万軍の【主】の権威と力に焦点を合わせることが、礼拝の鍵となる。

③私たちが見上げている神は、どのようなお方か。

III. 家庭の不和（4～8 節）

1. 4 節

1Sa 1:4 そのようなある日、エルカナはいけにえを献げた。彼は、妻のペニンナ、そして彼女のすべての息子、娘たちに、それぞれの受ける分を与えるようにしていたが、

(1) 「ある日になったとき」＝いけにえを献げる特別な日

- ①エルカナにとっては、喜びの日、厳粛な日である。
- ②彼は、律法に従って、いけにえを献げた。
- ③家族を霊的儀式に参加させた。

(ILL) 元旦での父親のスピーチ（祭司的役割）

(2) 妻のペニンナに、分け前（取り分）を与えた。

- ①これは、祭儀で分配される肉の部分である。
- ②彼女のすべての息子、娘たちに、それぞれの受ける分を与えるようにしていた。
- ③エルカナは、家族への責任を果たしていた。
- ④通常の分け前を与えていた。

* ハンナへの偏った愛情を際立たせるための布石

2. 5 節

1Sa 1:5 ハンナには特別の受ける分を与えていた。【主】は彼女の胎を閉じておられたが、彼がハンナを愛していたからである。

(1) ペニンナとハンナの対比

- ①ハンナには、特別な割り当て（二倍の分け前）与えていた。

* 量的にも質的にも特別な割り当て

- ②なぜなら、彼はハンナを愛していたから。
- ③語順に注意。しかし、【主】は彼女の胎を閉じておられた。

(2) 教訓

- ①ここには、人間の愛と神の主権の葛藤が見られる。
- ②ハンナの葛藤は、信仰の逆転劇の序章である。

3. 6 節

1Sa 1:6 また、彼女に敵対するペニンナは、【主】がハンナの胎を閉じておられたことで、彼女をひどく苛立たせ、その怒りをかき立てた。

(1) ペニンナは、わざと挑発的なことばや態度で、ハンナを苦しめた。

- ①動機の根源には、【主】がハンナの胎を閉ざしていたという事実がある。
- ②表面的には祝福を受けているが、その態度と動機は御心に反する。

(2) 教訓

- ①ペニンナのような存在は、信仰者の信仰を純化する道具となる。

4. 7 節

1Sa 1:7 そのようなことが毎年行われ、ハンナが【主】の家に上って行くたびに、ペニンナは彼女の怒りをかき立てるのだった。こういうわけで、ハンナは泣いて、食事をしようとしなかった。

- (1) この苦しみは、継続的な、年中行事のたびに繰り返されるものであった。

- ①エルカナは、【主】の家に上ることをくり返していた。
- ②ハンナは、霊的な期待感を持って【主】の家に上って行った。
- ③しかし、ペニンナのいじめによって、礼拝の場は苦痛の場となった。
- ④ハンナは、泣いて、食事をしようとしなかった。
- ⑤神との出会いを求める魂の叫びが見られる。

(2) 教訓

- ①信仰者が神に近づこうとすると、サタンが妨害をしかけてくる。
- ②私たちにとっても、礼拝の場は霊的戦いの場である。

5. 8 節

1Sa 1:8 夫エルカナは彼女に言った。「ハンナ、なぜ泣いているのか。どうして食べないのか。どうして、あなたの心は苦しんでいるのか。あなたにとって、私は十人の息子以上の者ではないか。」

- (1) エルカナの4つの疑問

- ①なぜ泣くのか？（感情）
- ②なぜ食べないのか？（肉体）
- ③なぜ心が痛むのか？（霊）
- ④私はあなたにとって十人の息子よりましではないか？（関係）

- (2) エルカナはハンナを思いやっているが、根本的な理解に欠けている。

- ①ハンナの苦しみは、「子がないこと」以上に、霊的なものであった。
- ②神を信じているが、神の沈黙に苦しんでいるという信仰者に特有の経験
- ③夫のことばをきっかけに、神に直接訴える道を選ぶことになる。

(3) 教訓

- ①神の沈黙は、信仰者の内に真実な祈りを生み出す。
- ②ハンナの祈りは、「痛みの祈りから、請願の祈りに」転換する。

結論：今日の信者への適用

- 1. 神のわざは、小さなことから始まる。
 - (1) キリストにある自分を過小評価してはならない。
- 2. 不遇は、神の計画の一部であることが多い。
 - (1) 遅れてくる答えは、想像を超える祝福をもたらす。
- 3. 万軍の【主】は、無名の人々の祈りを聞いてくださる。
 - (1) 祈りの力を軽視してはならない。

サムエル記第一 (2)

「ハンナの祈り」

1 サム 1：9～18

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1～9 章)

A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)

1. サムエルの家族 (1：1～8)
2. ハンナの祈り (1：9～18)
3. サムエルの誕生 (1：19～28)

2. 注目すべき点

- (1) 士師の時代の末期、イスラエルは政治的にも霊的にも、混乱状態にあった。
- (2) 新しい時代を導くのは、預言者サムエルである。
- (3) 前回は、神の御業は小さなことから始まるということを学んだ。
- (4) 今回は、サムエル誕生の経緯について学ぶ。

命題：イスラエルの民は、霊的刷新を必要としていた。

この個所に記された 3 つの対比が、そのことを示している。

I. 立ち上がる女 vs. 座っている祭司 (9 節)

1. 9 節

1Sa 1:9 シロでの飲食が終わった後、ハンナは立ち上がった。ちょうどそのとき、祭司エリは

【主】の神殿の門柱のそばで、椅子に座っていた。

- (1) この物語は、士師の時代の終わりに位置づけられている。
 - ①イスラエルは道徳的にも霊的にも混乱した状態にあった。
 - ②「人々は皆、自分の目に正しいと見えることを行っていた」
 - ③そのような時代に、神は新しい器を準備しておられた。
- (2) 「ハンナは立ち上がった」
 - ①これは単なる動作ではない。
 - ②彼女は、祈る決断、神のもとへ出て行く決断を下した。
- (3) 「祭司エリは【主】の神殿の門柱のそばで、椅子に座っていた」
 - ①「座っていた」は、ある種の受動性や無感覚さを象徴している。

- ②形式的には正しい場所にいながら、神の臨在に対しては無感覚である。
- ③これは、当時の祭司制度全体の霊的な鈍さを象徴している。

(4) 教訓

- ①神は、信仰によって「立ち上がる者」を用いられる。
- ②時代を変えるのは、地位や資格ではなく、信仰と行動である。

II. 祈る女 vs.鈍感な祭司 (10～13 節)

1. 10 節

1Sa 1:10 ハンナの心は痛んでいた。彼女は激しく泣いて、【主】に祈った。

- (1) ハンナという一人の信仰者の涙と祈りが、歴史の流れを変える。
 - ①「心の痛み」と「涙の祈り」は、苦難の中で希望を見いだすヘブル的信仰の型。
 - ②詩 6 篇、42 篇
- (2) 激しく泣く祈りは、メシアの系譜の起点となった。
 - ①ハンナの涙
 - ②サムエル誕生
 - ③預言者制度の幕開け
 - ④ダビデ王朝
 - ⑤メシアの系譜

2. 11 節

1Sa 1:11 そして誓願を立てて言った。「万軍の【主】よ。もし、あなたがはしための苦しみをご覧になり、私を心に留め、このはしめを忘れず、男の子を下さるなら、私はその子を一生の間、【主】にお渡しします。そしてその子の頭にかみそりを当てません。」

- (1) この請願は、万軍の【主】への呼びかけである。
 - ①サムエルの誕生は、イスラエルの霊的・軍事的刷新の第一歩となる。
 - ②この請願は、神の主権への信頼の表明である。
- (2) ナジル人の請願に似ている。
 - ①「頭にかみそりを当てません」は、ナジル人の外的しるしの一つである。
 - ②期間限定ではなく、「一生」という点で、この請願は特異なものである。
 - ③祈りの質の転換が見られる。
 - * 神の栄光のために子を求めた。
 - * サムエルは、預言者・祭司・士師として霊的刷新をもたらす。

(3) 教訓

- ①神の栄光をゴールとする祈りは、聞き届けられる。
- ②神の主権的働きと、それに応答する人間の信仰は、両立する必要がある。

3. 12～13 節

1Sa 1:12 ハンナが【主】の前で長く祈っている間、エリは彼女の口もとをじっと見ていた。

1Sa 1:13 ハンナは心で祈っていたので、唇だけが動いて、声は聞こえなかった。それでエリは彼女が酔っているのだと思った。

(1) ハンナの祈りの革新性

- ①個人が神に直接、静かに祈るというスタイルは斬新である。
- ②「心で祈っていた」は、旧約時代では極めて異例な表現である。
- ③沈黙の祈りは、人には理解されにくいですが、神には届く。

(2) エリの誤解

- ①当時の祭司制度は、霊的識別力を失っていた。
- ②祭司エリは、ハンナが酔っていると誤解した。
- ③祈る者 vs. 見る者の対比は、鮮明である。
- ④時代は、新しい啓示の受け手となる預言者を必要としていた。

III. 全的信頼 vs. 部分的理解 (14～18 節)

1. 14～16 節

1Sa 1:14 エリは彼女に言った。「いつまで酔っているのか。酔いをさませい。」

1Sa 1:15 ハンナは答えた。「いいえ、祭司様。私は心に悩みのある女です。ぶどう酒も、お酒も飲んでおりません。私は【主】の前に心を注ぎ出していたのです。」

1Sa 1:16 このはしためを、よこしな女と思わないでください。私は募る憂いと苛立ちのために、今まで祈っていたのです。」

(1) 「いつまで酔っているのか」

- ①叱責的ニュアンスが込められている。
- ②「あなたの上からぶどう酒を取り去れ」(直訳)
- ③これは、霊的リーダーによる権威の誤用である。
- ④エリは、神の宮で起きている真実な霊的行動を見抜けなかった。
- ⑤神の宮の管理者が、儀式的・外面的役割しか果たしていない。
- ⑥霊的リーダーの腐敗と信仰者の叫びの対比は、鮮烈である。

(2) 「いいえ、祭司様」

- ① 「いいえ、わが主よ」と丁寧なことばで応じた。
- ② 「私は【主】の前に心を注ぎ出していたのです」
- ③ 液体をこぼすように、心の奥底まで神に明け渡していた。
- ④ レビ人でも預言者でもない、ただの苦しむ信者の個人的な祈り
- ⑤ 自己の最も深い部分を差し出すのは、詩篇の祈りの型である。

(3) 「このはしためを、よこしまな女と思わないでください」

- ① 「ベリヤアルの娘」(ならず者の女)
- ② ハンナは自分のことを「はしため」と称した。
- ③ 彼女は、道徳的攻撃に対して明確に反論した。
- ④ エリの誤解の深刻さが浮き彫りになる。

(4) 教訓

- ① いわれのない批判を受けたなら、丁寧なことばで応じる。
- ② 道徳的攻撃に対しては、明確に、毅然とした態度で反論する。

2. 17 節

1Sa 1:17 エリは答えた。「安心して行きなさい。イスラエルの神が、あなたの願ったその願いをかなえてくださるように。」

(1) エリの態度は一変した。

- ① 霊的鈍感さからの部分的回復
- ② 「安心して行きなさい」→「平安（シャローム）のうちに帰りなさい」
- ③ 神の祝福を代弁する者へと変えられた。
- ④ 神は、不完全な者をも用いられる。

3. 18 節

1Sa 1:18 彼女は、「はしめが、あなたのご好意を受けられますように」と言った。それから彼女は帰って食事をした。その顔は、もはや以前ようではなかった。

(1) へりくだったことばで、エリに別れを告げた。

- ① 彼女は、通常の生活に戻った。
- ② 食事をした。顔は以前ようではなかった。
- ③ 心の状態が変化したのである。
- ④ 祈りの答えは得ていないが、エリのことばを答えの保証として受け取った。

(2) 教訓

- ①平穏な日常生活の回復は、内面の平安から始まる。
- ②神のことばに全信的頼を置くなら、内面の平安が与えられる。

結論：今日の信者への適用

1. 立ち上がる

- (1) 信仰の停滞を拒否する。
- (2) 心の一新によって、信仰的な行動を開始する。

2. 心を注ぎ出す

- (1) 形式ではなく、真実な心で神に向かう。
- (2) 形式的な祈りを捨て、誠実な祈りを献げる。

3. 委ねる

- (1) 神の栄光を第一に願う。
- (2) 祈りの答えを神に献げる決心をする。

4. 平安に生きる

- (1) 答えを見ずとも神を信頼する。
- (2) 万軍の【主】に不可能はない。

サムエル記第一 (3)

「サムエル誕生」

1 サム 1：19～28

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1～9 章)

A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)

1. サムエルの家族 (1：1～8)
2. ハンナの祈り (1：9～18)
3. サムエルの誕生 (1：19～28)

2. 注目すべき点

- (1) 士師記の時代の末期、イスラエルは政治的にも霊的にも、混乱状態にあった。
- (2) 新しい時代を導くのは、預言者サムエルである。
- (3) 前回は、ハンナの祈りについて学んだ。
- (4) 今回は、祈りの答えに対するハンナの応答について学ぶ。

命題：ハンナの行為は、信仰に基づく行為の完成形である。

彼女の行為の 4 つのステップが、そのことを示している。

I. 祈り：万軍の【主】に信頼する (18 節)

I. 18 節

1Sa 1:18 彼女は、「はしめが、あなたのご好意を受けられますように」と言った。それから彼女は帰って食事をした。その顔は、もはや以前のようなではなかった。

- (1) まだ祈りの答えは得ていないが、彼女の内に変化が起きている。

- ①エリは「安心して行きなさい」と答えた。
- ②ハンナは、へりくだったことばでエリに別れを告げた。
- ③「帰って」＝「自分の道を行った」＝日常生活に戻った。
- ④食事をした。
- ⑤内面の変化が顔に現れた。

- (2) 彼女は、エリのことばを神からの答えと受け取ったのである。

- ①彼女の信仰は、イスラエルの霊的再生の始点となった。

(3) 教訓

- ①神に委ねることが平安を得る秘訣である。
- ②心に平安があると、顔の表情にそれが反映される。

II. 誕生：人間の責務を果たす（19～20 節）

2. 19 節

1Sa 1:19 彼らは翌朝早く起きて、【主】の前で礼拝をし、ラマにある自分たちの家に帰って来た。エルカナは妻ハンナを知った。【主】は彼女を心に留められた。

(1) 人間の責任と神の主権のバランスが重要である。

- ①エルカナとハンナは、家に帰って来た。
- ②ハンナは、精神的にも肉体的にも回復し、夫婦関係が正常に戻った。

(2) 「知った」(ヤダー)

- ①これは性的関係を指す。
- ②創 4：1 「人は、その妻エバを知った」
- ③ハンナは、人間の責務を果たした。

(3) 「心に留める」(ザカール)

- ①「覚えている」
- ②神は、ハンナに対する恵みの時を定められた。
- ③創 8：1 「神は、覚えておられた」(箱舟の中の人と動物)
- ④時が満ちると、神は行動を開始される。
- ⑤神の「記憶」は、常に契約に基づく意志的記憶である。

(4) 教訓

- ①神の主権に応答するのが、人間の責務である。
- ②「日常的事象を通して超自然なことが起こる」＝ユダヤ的確信

3. 20 節

1Sa 1:20 年が改まって、ハンナは身ごもって男の子を産んだ。そして「私がこの子を【主】にお願いしたのだから」と言って、その名をサムエルと呼んだ。

(1) 神の御業は、自然の摂理に従って進められた。

- ①「年が改まって」＝「やがて」＝「その時が巡ってきて」
- ②ハンナは、男の子を産んだ。

(2) 「サムエル」という名前

- ①「神は祈りを聞かれた」
- ②神から与えられたという証しが、この名に込められている。
- ③サムエルの誕生は、預言者制度の始まりを告げる出来事である。

(3) 聖書における名前の意味

- ①神のご性質、介入、計画を示す「しるし」となる。
 - * イサク（笑い）
 - * サムエル（神が聞かれた）
- ②神からの使命や将来の働きを預言的に示すことがある。
 - * ヤコブ→イスラエル（神と格闘して勝った者）（民族の名の起源）
 - * イエス（主は救い）
- ③親の信仰の証しとなることがある。
 - * マナセ（忘れさせる）とエフライム（実を結ばせる）
- ④神が直接介入して命名することがある。
 - * アブラム（高く上げられた父）→アブラハム（諸国民の父）
 - * サライ（私の姫君）→サラ（王妃、諸国の母）
 - * バプテスマのヨハネ（主は恵み深い）

III. 乳離れ：神の時を待つ（21～23 節）

I. 21～22 節

1Sa 1:21 夫のエルカナは、年ごとのいけにえを【主】に献げ、自分の誓願を果たすために、家族そろって上って行こうとした。

1Sa 1:22 しかしハンナは、夫に「この子が乳離れして、私がこの子を連れて行き、この子が【主】の御顔を拝して、いつまでもそこにとどまるようになるまでは」と言って、上って行かなかった。

(1) ラマからシロへの巡礼

- ①エルカナは、律法に忠実な人である。
- ②巡礼祭を守っていた。
- ③家族そろってとは、妻、子、使用人など家のすべての者である。

(2) 「自分の誓願を果たすため」

- ①民 30 章によれば、妻の誓願は夫が認めたときに有効となる。
- ②エルカナは、ハンナの誓願に同意することで自らも誓願に参加した。
- ③彼は、サムエル奉献を実行するためにシロに上ろうとしたのであろう。

(3) ハンナは、上って行かなかった。

- ①彼女は、神の時を待った。
- ②当時は、2～3歳で乳離れするのが普通であった。
- ③ハンナは、最小限の自立ができるまで養育すると決めた。
- ④時がきたなら、自分の手で息子を献げる決心をした。
- ⑤サムエルの献身は、ナジル人と異なり、生涯にわたるものである。

(4) 教訓

- ①私たちも、最善のタイミングと方法を模索すべきである。

2. 23 節

1Sa 1:23 夫のエルカナは彼女に言った。「あなたが良いと思うようにしなさい。この子が乳離れするまでとどまりなさい。ただ、【主】がそのおことばを実現してくださるように。」こうしてハンナはとどまって、その子が乳離れするまで乳を飲ませた。

(1) 夫の同意により妻の誓願は有効になった。

- ①子を乳離れさせてから、【主】に献げるという誓願
- ②これは、感情ではなく、知恵と信仰に基づく判断である。
- ③ハンナは、その子が乳離れするまで家にとどまった。

IV. 奉献：請願を実行する (24～28 節)

1. 24 節

1Sa 1:24 その子が乳離れしたとき、彼女は子牛三頭、小麦粉一エパ、ぶどう酒の皮袋一つを携えてその子を伴って上り、シロにある【主】の家に連れて行った。その子はまだ幼かった。

(1) 請願の実行

- ①サムエルをシロに連れて行く。
- ②【主】との契約に基づく行為である。
- ③豊かなささげ物を献げる。
- ④感謝と献身のための完全なささげ物である。

(2) レビ記 1～3 章：1サム 1：24

- ①全焼のささげ物：子牛 3 頭（または 3 歳の子牛）
- ②穀物のささげ物：小麦粉 1 エパ（約 2ℓ）
- ③注ぎのささげ物：ぶどう酒の皮袋 1 つ

(3) 「その子はまだ幼かった」

- ①「その子はまだ本当に幼かった」
- ②同じことば（ナアール）のくり返しによる意味の強調
- ③サムエルは、実年齢的にも精神的にも、極めて幼かった。
- ④サムエルは、神の召命と所有の中にある。

2. 25 節

1Sa 1:25 彼らは子牛を屠り、その子をエリのところに連れて行った。

(1) 礼拝の完成が見られる。

①誓願→②誕生→③乳離れ→④奉献

3. 26～27 節

1Sa 1:26 ハンナは言った。「ああ、祭司様。あなたは生きておられます。祭司様。私はかつて、ここでああなたのそばに立って、【主】に祈った女です。

1Sa 1:27 この子のことを、私は祈ったのです。【主】は私がお願いしたとおり、私の願いをかなえてくださいました。

(1) エリに対する自己紹介

- ①「あなたは生きておられます」とは、誓いのことばである。
- ②私はかつて【主】に祈った女である。
- ③今、祈りの答えを伴ってここに来た。

(2) 【主】の家に仕える子どもを献げる母の模範である。

- ①祭司エリへの敬意
- ②誓願を果たそうとする情熱
- ③【主】の主権を認める信仰

4. 28 節

1Sa 1:28 それで私もまた、この子を【主】におゆだねいたします。この子は一生涯、【主】にゆだねられたものです。」こうして彼らはそこで【主】を礼拝した。

(1) ハンナは、「【主】に願った」ものを「【主】に返した」。

- ①子どもは、神から貸し出されたものである。
- ②この奉献は、一生にわたる奉献である。
- ③エルカナとハンナは、そこで【主】を礼拝した。

(2) 教訓

- ①信仰とは、願うことなく、委ねることである。

結論：今日の信者への適用

1. 祈りの答えを記憶する。
 - (1) サムエルという名前には意味がある。
 - (2) 祈った場所に戻るという行為は、信仰の記念となる。
 - (3) その記憶は、礼拝における感謝につながる。
2. 祝福を神に返す。
 - (1) 与えられた祝福を神に献げ返すのが信仰である。
 - (2) 人生の優先順位の確立も、そこに含まれる。
 - (3) 祝福の流れの起点となろう。
3. 子どもを神からの預かりものとして育てる。
 - (1) 子どもの人生に用意された神の計画を発見する。
 - (2) 親の夢の投影ではなく、神の計画に則した子育てを実行する。
 - (3) クリスマンホームの育成の原則を学ぶ。
4. 祈りのサイクルの締めくくりは、礼拝である。
 - (1) 礼拝は信仰の着地点である。
 - (2) 叶えられた祈りは、私たちを礼拝へと導く。
 - (3) ハンナの信仰は、願うことにとどまらず、献げることで完成された。
 - (4) ここには、信仰が成長するためのサイクルがある。

サムエル記第一 (4)

「ハンナの賛歌」

1 サム 2 : 1~10

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1~9 章)

A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)

B. ハンナの賛歌 (2 : 1~10)

2. 注目すべき点

- (1) 士師記の時代の末期、イスラエルは政治的にも霊的にも、混乱状態にあった。
- (2) 新しい時代を導くのは、預言者サムエルである。
- (3) ハンナは、信仰によって息子を得た。
- (4) 乳離れした息子を【主】に委ねたハンナは、賛歌を詠んだ。
- (5) 神から預言的な内容を含むことばを与えられ、それを賛歌として語った。

命題：ハンナの賛歌は感謝と預言を含む。

この賛歌の3つのステップを学ぶとそれが分かる。

I. 個人的な救いの喜び (1~2 節)

1. 1 節

1Sa 2:1 ハンナは祈った。／「私の心は【主】にあって大いに喜び、／私の角は【主】によって高く上がります。／私の口は敵に向かって大きく開きます。／私があなたの救いを喜ぶからです。

(1) 段階的対句

①心が大いに喜ぶ (内面の喜び)

*主語は「私の心」であり、全人的喜びを表現している。

②角が高く上げる (力の回復)

*主語は「私の角」であり、力と尊厳の回復を示している。

③口が大きく開く (勝利の表現)

*主語は「私の口」であり、それが大きく開くのは勝利の宣言・賛美の比喩。

*「敵」は、ペニンナを含む、ハンナを軽蔑した人々である。

④救いを喜ぶ (理由の明示)

*主語は「私」であり、神の介入による完全な介入を喜ぶ。

*「救い」＝「イエシュア」

*終末的救いをも指し示すことばとして旧約全体で用いられる。

(2) 個人的経験が、イスラエルの歴史的経験の型となっている。

- ①不妊＝民の無力さ
- ②出産＝神の介入による回復
- ③敵に対する勝利＝終末における神の民の勝利

2. 2 節

1Sa 2:2 【主】のように聖なる方はいません。／まことに、あなたのほかにはだれもいないのです。／私たちの神のような岩はありません。

(1) 3 重の類義的対句

①聖なる神（性質）

* 神の聖性は比類なく、被造物から完全に区別されていることを宣言。

②あなた以外にいない（唯一性）

* ユダヤ人の信仰告白の土台である。

* 「シェマー」（申 6：4）の延長線上にある表現。

③イスラエルの神のような岩はない（守りと信実）

* 「岩」は、堅固さ・安定・避け所・契約的忠実さを象徴している。

* 申 32 章や詩篇でくり返されることばである。

I. 個人的な救いの喜び（1～2 節）

II. 逆転の法則（3～8 節）

1. 3 節

1Sa 2:3 おごり高ぶって、／多くのことを語ってはなりません。／横柄なことばを口にしてはなりません。／まことに【主】は、すべてを知る神。／そのみわざは測り知れません。

(1) 2 部構成の対句

①禁止命令（前半 2 行）：高慢なことばを語るな。

②理由（後半 2 行）：神は知識の神であり、行いを評価する。

* 【主】は、完全で誤りなき洞察を持つ方である。

* 「人の行いを量られます」（共同訳）＝公平な裁きを意味する。

* 高慢なことばや態度は、神の義によって必ず裁かれる。

2. 4 節

1Sa 2:4 勇士が弓を砕かれ、／弱い者が力を帯びます。

(1) 反意的対句

①勇士の弓は砕かれる。

- * 人間の力に依存する者の限界を示す。
- * 神に敵対する勢力（終末的には諸国民）の武力も最終的には碎かれる。

②弱い者が力を得る。

- * ペニンナという「強者」に苦しめられたが、神の介入によって回復。
- * 個人的な経験は、普遍的適用を持つ。

3. 5 節

1Sa 2:5 満ち足りていた者がパンのために雇われ、／飢えていた者に、飢えることがなくなります。／不妊の女が七人の子を産み、／子だくさんの女が、打ちしおれてしまいます。

(1) 2組の反意的対句

①満ち足りた者 vs. 飢えていた者

- * 経済的・生活状況の逆転
- * 神の主権的介入による

②不妊の女 vs. 多くの子を持つ女

- * 家庭・名誉の逆転
- * 不妊の女はイスラエルの象徴。
- * 7人の子（完全さ・充足）は、終末的イスラエルの民の繁栄。
- * 多くの子を持つ女が衰える＝神に敵対する諸国が没落する預言。

4. 6 節

1Sa 2:6 【主】は殺し、また生かします。／よみに下し、また引き上げます。

(1) 2組の反意的対句

①【主】は殺す vs. 【主】は生かす。

- * 人間や偶像には命を与えたり奪ったりする権限はない。
- * 死の時と方法も、命の始まりも、神の主権の下にある。

②よみに下す vs. 引き上げる。

- * 「よみに下し、また引き上げる」は病からの回復だけでなく、復活を含む。
- * 終末における義人の復活も、この神の権威の現れ。

(2) イスラエルの歴史的・預言的適用

- ①死と再生は、国としてのイスラエルの滅亡と回復にも当てはまる。
- ②バビロン捕囚や諸国への離散からの回復は、この逆転の法則の歴史的事例。
- ③患難期からの回復とメシア的王国への復興を指し示す。

5. 7 節

1Sa 2:7 【主】は貧しくし、また富ませ、／低くし、また高くします。

(1) 2組の反意的対句

①貧しくする vs. 富ませる

＊経済的逆転

②低くする vs. 高くする

＊地位・名誉の逆転

＊富や地位は人間の努力や偶然ではなく、神の主権的決定によることを強調。

(2) 地位の変化も神の支配下にある。

①人の昇進や降格、国家の栄枯盛衰も神の摂理の一部。

②諸国民が低められ、イスラエルが高められる預言的パターンに重なる。

6. 8 節

1Sa 2:8 主は、弱い者をちりから起こし、／貧しい者をあくたから引き上げ、／高貴な者とともに座らせ、／彼らに栄光の座を継がせます。／まことに、地の柱は【主】のもの。／その上に主は世界を据えられました。

(1) 前半（人間の領域）と後半（宇宙的領域）の二部構成

①人間社会における逆転（4つの対句）

＊弱い者をちりから起こし、

＊貧者をあくたから引き上げ、

＊貴族と同席させ、

＊栄光の座を与える。

②神の主権と創造主としての権威（2つの対句）

＊地の柱は【主】のもの。

＊その上に主は世界を据えられた。

(2) イスラエルの回復の型

①諸国の中で卑しめられていた状態から、メシア的王国における高貴な地位へ

②最終的には、栄光の座を与えられる。

I. 個人的な救いの喜び（1～2 節）

II. 逆転の法則（3～8 節）

III. メシア的預言（9～10 節）

1. 9 節

1Sa 2:9 主は敬虔な者たちの足を守られます。／しかし、悪者どもは、闇の中に滅び失せます。

／人は、自分の能力によっては勝てないからです。

(1) 対照的対句

①義人の保護 vs. 悪者の滅び

* 足を守るとは、信仰の歩みを守ること。

* 闇の名に滅び失せるとは、現世的裁きと終末的裁きの両方にかかる。

②その根拠：人間の力は勝利の条件にならない（結論）。

(2) イスラエルへの適用

①歴史的にイスラエルは軍事的には弱かったが、神の介入によって勝利してきた。

②患難期においても、神が彼らを守って勝利に導く。

2. 10 節

1Sa 2:10 【主】は、はむかう者を打ち砕き、／その者に天から雷鳴を響かせられます。／【主】は地の果ての果てまでさばられます。／主が、ご自分の王に力を与え、／主に油注がれた者の角を／高く上げてくださいますように。」

(1) 4つの動きで構成されている。

①敵の粉碎（はむかう者を打ち砕く）

②天からの裁き（雷鳴による威嚇）

③全地的統治（地の果てまで裁く）

④メシア的王の高揚（メシアの角を上げる）

(2) メシア的王の予告

①サムエル記の冒頭の時点では、まだ歴史的には登場していない。

②「メシア」（油注がれた者）ということばは、終末的支配者の予告。

③「地の果ての果てまで」は、メシア的王国の広がりへの予告。

④「角」（1 節）で始まり、「角」（10 節）で終わる。

⑤ハンナの賛歌は、ルカ 1 章のマリアの賛歌に影響を与えた。

結論：今日の信者への適用

1. 神の主権を信頼する姿勢（1～2 節）

(1) ハンナは、自分が経験した解放を「主の救い」と認めた。

(2) 祝福や勝利は、神の恵みによるものである。

(3) 「聖なる方」「唯一の神」「岩」という三重の告白が重要である。

2. 高慢を退け、謙遜に歩む（3 節）

- (1) 神は心の動機まで見抜き、正しく評価される。
- (2) 成功時にも謙遜を保ち、すべてのことを神の栄光のために行う (1 コリ 10:31)。

3. 神の逆転の法則を覚える (4～8 節)

- (1) 個人的な逆転の法則
- (2) 普遍的な逆転の法則

4. メシア到来と最終的な勝利の希望 (9～10 節)

- (1) ハンナの賛歌は、終末的希望を詠っている。
- (2) 現在の試練や争いも、最終的には、メシアの完全な支配の下で解決される。

サムエル記第一 (5)

「シロでの霊的状况」

1 サム 2 : 11～36

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1～9 章)

A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)

B. ハンナの賛歌 (2 : 1～10)

C. シロでの霊的状况 (2 : 11～36)

1. エリの息子たち (11～17 節)

2. サムエル (18～21 節)

3. エリ (22～26 節)

4. 神の介入 (27～36 節)

2. 注目すべき点

(1) 士師記の時代の末期、イスラエルは政治的にも霊的にも、混乱状態にあった。

(2) 新しい時代を導くのは、預言者サムエルである。

(3) ハンナは、信仰によって息子を奉献した。

(4) シロでの霊的状况は悲惨であった。

命題：イスラエルは霊的刷新を必要としていた。

エリの息子たち、サムエル、エリ、神の介入を見るとそれが分かる。

I. エリの息子たち (11～17 節)

1. 11 節

1Sa 2:11 エルカナはラマにある自分の家に帰った。幼子は、祭司エリのもとで【主】に仕えていた。

(1) エリはサムエルの養父のような役割を果たした。

①エリの年齢は 70 歳を超えていたであろう。

②エルカナとハンナの判断は、信仰に基づくものであった。

③エリは自分の息子たちの養育に失敗した。

④その経験を生かして、サムエルを正しい道に導いた。

2. 12 節

1Sa 2:12 さて、エリの息子たちはよこしまな者たちで、【主】を知らなかった。

(1) エリの息子たち

①「よこしまな者たち」(新改訳 2017)

②「いずれもならず者」(共同訳)

(2)「【主】を知らなかった」

①彼らは、信仰による救いを体験していなかった。

(ILL) スボルジョン著『Lectures to My Students』(牧会入門)
牧師の条件は救われていること。

3. 13～16 節 (3つの罪)

(1) 交わりのいけにえを横取りした。

①祭司が受ける分は、胸肉と右のもも肉である (レビ 7:28～34)。

②それだけでは満足せず、三又の肉刺しを鍋に突き入れた。

(2) 脂肪が焼かれる前に、生肉を要求した。

①民がいさめても、力づくで要求を通した。

②律法を無視した。

(3) 肉を煮ないで、焼いた。

①律法よりも食欲を優先させた。

②経済的利得を優先させた。

4. 17 節

1Sa 2:17 このように、子弟たちの罪は、【主】の前で非常に大きかった。この人たちは【主】へのささげ物を侮ったのである。

(1) イスラエルの民の霊的状况が描写されている。

①霊的指導者たちの墮落は、民に悪影響をもたらす。

②形式的な宗教の仕組みは存在していたが、実態がなかった。

II. サムエル (18～21 節)

1. 18 節

1Sa 2:18 さてサムエルは、亜麻布のエポデを身にまとった幼いしもべとして、【主】の前に仕えていた。

(1)「【主】の前に仕えていた」

①エリの息子たちとの対比

②「【主】のみもとで成長した」(21 節)

③最小限の奉仕であったが、幼子は【主】を認識していた。

2. 19～20 節

1Sa 2:19 彼の母は彼のために小さな上着を作り、毎年、夫とともに年ごとのいけにえを献げに上って行くとき、それを持って行った。

1Sa 2:20 エリは、エルカナとその妻を祝福して、「【主】にゆだねられた子の代わりとして、【主】が、この妻によって、あなたに子孫を与えてくださいますように」と言い、彼らは自分の住まいに帰るのであった。

(1) 母の愛

- ①ハンナは、サムエルのために毎年エポデを作り、それを持って行った。
- ②このエポデは、祭司が着用するものであった。
- ③ハンナは、祭司職に敬意を払い、息子が立派な祭司に成長することを願った。

(2) エリの祝福のことば

- ①【主】に献げた子の代わりとして、子孫が与えられるように。

3. 21 節

1Sa 2:21 【主】はハンナを顧み、彼女は身ごもって、三人の息子と二人の娘を産んだ。少年サムエルは【主】のみもとで成長した。

(1) 【主】はハンナを祝福された。

- ①3 人の息子
- ②2 人の娘
- ③サムエルの成長

(ILL) アブラハムはイサクを献げたが、イサクを失わないで、さらに多くの子を得た。

III. エリ (22～26 節)

1. 22 節

1Sa 2:22 さて、エリはたいへん年をとっていたが、息子たちがイスラエル全体に行っていることの一部始終を、それに彼らが会見の天幕の入り口で仕えている女たちと寝ていることを聞いていた。

(1) エリの息子たちはカナン人の礼拝形式の影響を受けていた。

- ①バアル礼拝では、神殿娼婦との淫行が礼拝の一部となっていた。
- ②エリの息子たちは、寝ていた女たちは、神殿娼婦ではない。
- ③幕屋の入り口で仕えているボランティアの女たちである。

2. 23～25 節

(1) エリは、ようやく息子たちを叱責する。

- ①遅すぎる叱責は、なんの効果ももたらさない。
- ②モーセの律法によれば、意図しない罪は赦された。
- ③しかし、意図的な罪は赦されなかった。

(2) 神の裁きが下る。

- ①心が頑なにされる。出エジプト記のファラオのように。
- ②いのちが奪われる。【主】のみこころである。

(3) エリの息子は、ホフニとピネハスである。

- ①民 25 章のピネハス（エルアザルの息子）
 - * ミディアン人の女と寝ようとしたイスラエル人の男を殺した。
- ②1 サム 2 章のピネハス（エリの息子）
 - * 奉仕者の女たちと寝ていた。
- ③およそ 300 年の間に、祭司階級はかくも墮落した。

3. 26 節

1Sa 2:26 一方、少年サムエルは、【主】にも人にもいつくしまれ、ますます成長した。

(1) サムエルは【主】に従った。

- ①【主】にも人にもいつくしまれた。
- ②ますます成長した。
- ③ルカ 2：52

Luk 2:52 イエスは神と人とのいつくしまれ、知恵が増し加わり、背たけも伸びていった。

IV. 神の介入 (27～36 節)

1. 27～29 節

(1) 無名の預言者がエリのもとに遣わされる。

- ①出エジプトの出来事は【主】から与えられた恵みである。
- ②祭司として召されることも、恵みである。
- ③アロンの家系が祭司として召された。
- ④いけにえの肉の取り分が設定されたことも、恵みである。

(2) しかし、祭司たちは正しく応答しなかった。

- ①感謝、信頼、従順の欠如

(3) エリが叱責される。

①息子たちの欲望を律法の規定よりも優先させている。

②祭司は真実な人でなければならないが、息子たちは邪悪な者となった。

2. 30 節

1Sa 2:30 それゆえ——イスラエルの神、【主】のことば——あなたの家と、あなたの父の家は、永遠にわたしの前に歩むとわたしは確かに言ったものの、今や——【主】のことば——それは絶対にあり得ない。わたしを重んじる者をわたしは重んじ、わたしを蔑む者は軽んじられるからだ。

(1) サムエル記全体の中心聖句である。

3. 31～34 節

(1) エリの下る裁き

①エリの家には年長者がいなくなる。

②シロの幕屋は朽ち果てる。

③ホフニとピネハスは同じ日に死ぬ（4：11）。

(2) この預言は成就する。

①サウル王が祭司アヒメレクと息子たち全員を殺した（22：16～20）。

②エブヤタルだけが助かる。

③エブヤタルはソロモンによって祭司職を奪われる（1列2：27）。

④祭司職は、イタマルの家系からエレアザルの家系に戻される。

4. 35～36 節

1Sa 2:35 わたしは、わたしの心と思いの中で事を行う忠実な祭司を、わたしのために起こし、彼のために確かな家を建てよう。彼は、わたしに油注がれた者の前をいつまでも歩む。

1Sa 2:36 あなたの家の生き残った者はみな、銀貨一枚とパン一つを求めて彼のところに来てひれ伏し、『どうか、祭司の務めの一つでも私にあてがって、パンを一切れ食べさせてください』と言う。」

(1) 「忠実な祭司」

①エレアザルの家のツァゾクである。

②彼はダビデとソロモンの時代に活動する。

③彼の祭司職は千年王国においても継続する（エゼ44：15）。

Eze 44:15 しかし、イスラエルの子らが迷ってわたしから離れたときも、わたしの聖所の任務を果たした、ツァドクの子孫のレビ人の祭司たちは、わたしに近づいてわたしに仕え、わたし

の前に立ち、わたしに脂肪と血を献げることができる——【神】である主のことば——。

(2) それ以外の可能性

- ①サムエル
- ②メシア

結論：今日の信者への適用

1. 宗教的な立場と霊的な実態は別である

(1) 立場

- * 教会に長年通っている
- * 奉仕をしている
- * 献金をしている
- * 神学を学んでいる

(2) 実態

- * 主を個人的に知っている
- * 奉仕の資格の第一は能力ではなく、救われていること

2. 小さな忠実さを神は喜ばれる

- (1) ホフニとピネハスは大人だった。
- (2) サムエルは幼い子どもだった。
- (3) 神が評価されたのはサムエルだった

3. 親は子どもの霊的成長に責任を負っている

(1) ハンナ

- * 子を【主】に献げた
- * 毎年会いに行った
- * 小さな上着を作り続けた
- * 彼女は手放した後も祈り続けた

(2) エリ

- * 息子の罪を知っていた
- * 注意した
- * しかし断固とした処置を取らなかった

(3) 対比

- * ハンナは遠くから育てた
- * エリは近くにいて育てられなかった

サムエル記第一 (6)

「サムエルの召し」

1 サム 3 : 1~10

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1~9 章)

- A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)
- B. ハンナの賛歌 (2 : 1~10)
- C. シロでの霊的状况 (2 : 11~36)
- D. サムエルの召し (3 章)
 - 1. 神の声 (1~10 節)
 - 2. 神の御告げ (11~14 節)
 - 3. サムエルの奉仕 (15~21 節)(今回は、1 を取り上げる)

2. 注目すべき点

- (1) 士師記の時代の末期、イスラエルは政治的にも霊的にも、混乱状態にあった。
- (2) 新しい時代を導くのは、預言者サムエルである。
- (3) ハンナは、信仰によって息子を奉献した。
- (4) シロでの霊的状况は悲惨であった。
- (5) サムエルが預言者として召される。

命題：神は霊的な目が開かれた忠実な者を用いる。

この箇所を 3 区分して学ぶとそれが分かる。

I. 当時の霊的状况 (1~3 節)

1. 1 節

1Sa 3:1 さて、少年サムエルはエリのもとで【主】に仕えていた。そのころ、【主】のことはまれにしかなく、幻も示されなかった。

(1) 「少年サムエル」

- ① 「少年」はヘブル語で「ナアル」である。
- ② 通常は 10 代の青年を指すことばである。
- ③ ヨセフは、サムエルは 12 歳であったと書いている。
- ④ サムエル奉献から約 10 年が経過している。

(2) 「エリのもとで【主】に仕えていた」

- ①エリは自分の息子たちの養育には失敗したが、サムエルの養育には成功した。
- ②サムエルは約 10 年、自分にできる奉仕を積み重ねてきた。

(3) 「そのころ、【主】のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった」

- ①通常は、【主】からの啓示は、預言者を通して与えられる。
- ②士師たちの時代の末期、【主】から啓示はまれにしかなかった。
- ③イスラエルの霊的墮落を暗示している。
- ④肉体的にも霊的にも目が開かれていたのは、サムエルである。
- ⑤サムエルから預言者制度が始まる。

2. 2～3 節

1Sa 3:2 その日、エリは自分のところで寝ていた。彼の目はかすんできて、見えなくなっていた。

1Sa 3:3 神のともしびが消される前であり、サムエルは、神の箱が置かれている【主】の神殿で寝ていた。

(1) 祭司エリとサムエルの対比は顕著である。

- ①エリは、大祭司の寝室で寝ていた。
- ②彼の目はかすんできて、見えなくなっていた。

(2) サムエルは、聖所の中庭で寝ていたのであろう。

- ①恐らく燭台の火の番をしていたのであろう。
- ②「神のともしびが消される前」とは、夜明け前である。
- ③霊的闇から霊的夜明けへの移行が予感される。

I. 当時の霊的状况 (1～3 節)

II. 【主】からの 3 度の呼びかけ (4～9 節)

1. 4～5 節

1Sa 3:4 【主】はサムエルを呼ばれた。彼は、「はい、ここにおります」と言って、

1Sa 3:5 エリのところに走って行き、「はい、ここにおります。お呼びになりましたので」と言った。エリは「呼んでいない。帰って、寝なさい」と言った。それでサムエルは戻って寝た。

(1) 1 度目の呼びかけ

- ①ある日の夜明け前、サムエルは自分の名を呼ぶ声を聞いた。
- ②サムエルは、エリが自分を呼んでいると誤解した。
- ③彼は、エリのところに走って行った。
- ④「はい、ここにおります。お呼びになりましたので」と言った。

⑤サムエルの忠実な姿勢がよく表れている。

(2) エリは、「呼んでいない。帰って、寝なさい」と言った。

2. 6～7 節

1Sa 3:6 【主】はもう一度、サムエルを呼ばれた。サムエルは起きて、エリのところに行き、「はい、ここにおります。お呼びになりましたので」と言った。エリは「呼んでいない。わが子よ。帰って、寝なさい」と言った。

1Sa 3:7 サムエルは、まだ【主】を知らなかった。まだ【主】のことばは彼に示されていなかった。

(1) 2 度目の呼びかけ

- ①2 度目も同じことが起こった。
- ②【主】はサムエルを呼ばれた。
- ③サムエルはエリのところに行った。
- ④エリは「呼んでいない」と応じた。

(2) 「サムエルは、まだ【主】を知らなかった」

- ①まだ救われていなかったという意味ではない。
- ②エリの息子たちは救われていなかった。

1Sa 2:12 さて、エリの息子たちはよこしまな者たちで、【主】を知らなかった。

- ③後に【主】を体験するようなレベルでの体験はなかった。
- ④つまり、【主】からの直接的語りかけを体験していなかったという意味である。

3. 8～9 節

1Sa 3:8 【主】は三度目にサムエルを呼ばれた。彼は起きて、エリのところに行き、「はい、ここにおります。お呼びになりましたので」と言った。エリは、【主】が少年を呼んでおられるということを悟った。

1Sa 3:9 それで、エリはサムエルに言った。「行って、寝なさい。主がおまえを呼ばれたら、『【主】よ、お話しください。しもべは聞いております』と言いなさい。」サムエルは行って、自分のところで寝た。

(1) 3 度目の呼びかけ

- ①サムエルは、3 度目の呼びかけにも忠実に応答した。
- ②サムエルはエリのところに行った。
- ③エリはようやく悟った。

* 「【主】が少年を呼んでおられる」

④エリの霊性はまだ残っていた。

(2) エリの好判断

①【主】がおまえを呼ばれたら、こう言いなさい。

*「【主】よ、お話してください。しもべは聞いております」

②サムエルは行って、自分のところで寝た。

③【主】の声を聞くためには、従順な心で静まる必要がある。

I. 当時の霊的状况 (1～3 節)

II. 【主】からの 3 度の呼びかけ (4～9 節)

III. 【主】からの 4 度目の呼びかけ (10 節)

1. 10 節

1Sa 3:10 【主】が来て、そばに立ち、これまでと同じように、「サムエル、サムエル」と呼ばれた。サムエルは「お話してください。しもべは聞いております」と言った。

(1) これは幻ではない。

①神は忍耐された。

②意識がある状態で、【主】の臨在を体験した。

*単なる声ではなく、それ以上のものである。

③これまでと同じように、「サムエル、サムエル」と呼ばれた。

(2) サムエルは【主】であることを認識し、応じた。

①「お話してください。しもべは聞いております」

②「【主】よ」ということばを省略している。

③サムエルの認識が深まっていることを示している。

結論：今日の信者への適用

1. 霊的暗黒の時代にも、神はご自身の働きを進めておられる。

(1) サムエルの時代は、「主のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった」時代

(2) 今日も同じような状況にある。

*聖書の権威が軽視される

*真理よりも感情や体験が優先される

*教会の世俗化が進む

*道徳的混乱が広がる

(3) しかし、そのような時代であっても、神はサムエルを備えておられた。

(4) 神は今も忠実なしもべを育てておられるという希望を持つべきである。

2. 大きな使命は、小さな忠実さから始まる。

- (1) サムエルは突然預言者になったのではない。
- (2) 約 10 年間、忠実な務めを続けてきた。
 - * 神殿で奉仕し
 - * エリに仕え
 - * 与えられた務めを果たした。
- (3) 神は忠実さを見ておられる。
- (4) 「小事に忠実な者は、大事にも忠実である」(ルカ 16:10)

3. 神の声を聞くためには、静まる時間が必要である。

- (1) サムエルは夜明け前の静かな時間に【主】の声を聞いた。
- (2) 現代人は、雑音に囲まれている。
 - * スマートフォン
 - * SNS
 - * ニュース
 - * 娯楽
- (3) 神は今、聖書を通して語っておられる。
- (4) 「神が語っておられるか」ではなく、「私たちが聞いているか」。
- (5) 「聞いております。お語りください」と祈ろう。

4. 神の導きを理解するためには、成熟した信者の助けが必要である。

- (1) エリがサムエルを助けた。
- (2) 神はしばしば、霊的に成熟した人を通して導きを与えられる。
 - * 牧師
 - * 教師
 - * 霊的指導者
 - * 信仰の先輩
- (3) 孤立した信仰生活は危険である。

サムエル記第一 (7)

「サムエルの奉仕」

1 サム 3 : 11~21

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1~9 章)

- A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)
 - B. ハンナの賛歌 (2 : 1~10)
 - C. シロでの霊的状况 (2 : 11~36)
 - D. サムエルの召し (3 章)
 - 1. 神の声 (1~10 節)
 - 2. 神の御告げ (11~14 節)
 - 3. サムエルの奉仕 (15~21 節)
- (今回は、2 と 3 を取り上げる)

2. 注目すべき点

- (1) 士師記の時代の末期、イスラエルは政治的にも霊的にも、混乱状態にあった。
- (2) 新しい時代を導くのは、預言者サムエルである。
- (3) ハンナは、信仰によって息子を奉献した。
- (4) シロでの霊的状况は悲惨であった。
- (5) サムエルが預言者として召される。
- (6) サムエルは預言者として堅く立てられる。

命題：預言者の使命は、神のことばを正確に伝えることである。

この箇所を 2 区分して学ぶとそれが分かる。

I. 神の御告げ (11~14 節)

1. 11 節

1Sa 3:11 【主】はサムエルに言われた。「見よ、わたしはイスラエルに一つのことをしようとしている。だれでもそれを聞く者は、両耳が鳴る。

(1) 【主】がサムエルに語られた内容

- ① 1 サム 2 : 27~36 で「神の人」が預言した内容と同じである。
 - ② 「イスラエルに一つのことをしようとしている」
 - ③ エリの家の下る裁きの預言である
 - ④ 「だれでもそれを聞く者は、両耳が鳴る」
- * 両耳を叩かれたときのように、衝撃を受けるという意味である。

(2) 「両耳が鳴る」という表現

①王国時代の始まりの時

②王国時代の終りの時 (2 列 21 : 12、エレ 19 : 3)

2Ki 21:12 それゆえ、イスラエルの神、【主】はこう言われる。見よ、わたしはエルサレムとユダにわざわいをもたらす。だれでもそれを聞く者は、両耳が鳴る。

Jer 19:3 『ユダの王たちとエルサレムの住民よ、【主】のことばを聞け。イスラエルの神、万軍の【主】はこう言われる。見よ、わたしはこの場所にわざわいをもたらす。だれでもそのことを聞く者は、両耳が鳴る。

2. 12～13 節

1Sa 3:12 その日わたしは、エリの家についてわたしが語ったことすべてを、初めから終わりまでエリに実行する。

1Sa 3:13 わたしは、彼の家を永遠にさばくと彼に告げる。それは息子たちが自らにのろいを招くようなことをしているのを知りながら、思いとどまらせなかった咎のためだ。

(1) エリの家は祭司職から追放される。

①「初めから終わりまで」実現する。

(2) 裁きの理由

①息子たちは邪悪であった。

②エリはそれを知りながら、阻止しなかった。

(3) この預言の成就の時期

①エリは間もなく死ぬ。

②さらに 3 代に渡ってエリの家系は祭司職にとどまる。

*エリーピネハスーアヒトブーアヒヤ

*アヒヤはサウル王に仕える大祭司であった。

*1サム 14 : 3 には「イ・カボデ」(栄光は去った) の名が出てくる。

1Sa 14:3 アヒヤは、エポデを身に着けていた。アヒヤはアヒトブの子で、アヒトブはイ・カボデの兄弟、イ・カボデはピネハスの子、ピネハスは、シロで【主】の祭司であったエリの子である。

3. 14 節

1Sa 3:14 だから、わたしはエリの家について誓う。エリを家の咎は、いけにえによっても、穀物のささげ物によっても、永遠に赦されることはない。」

(1) エリの家から祭司職を取り去るという神の裁きは、撤回されない。

①アヒヤの息子エブヤタルは、ソロモン王によって追放される (1 列 2 : 35)。

1Ki 2:35 王はエホヤダの子ベナヤを彼の代わりに軍団長とした。また、王は祭司ツァドクをエブヤタルの代わりにした。

②預言は 130 年後に成就した。

③アロンーエレアザル……ツァゾク

II. サムエルの奉仕 (15～21 節)

1. 15 節

1Sa 3:15 サムエルは朝まで寝て、それから【主】の家の扉を開けた。サムエルは、この黙示のことをエリに知らせるのを恐れた。

(1) 「【主】の家の扉を開けた」

①幕屋の周りに壁が立てられていたのであろう。扉は、夜間閉ざされていた。

②扉を開けたのは、預言者としての活動の始まりを暗示している。

(2) 「この黙示のことをエリに知らせるのを恐れた」

①預言者は、神のみを恐れるべきである。

2. 16～17 節

1Sa 3:16 エリはサムエルを呼んで言った。「わが子サムエルよ。」サムエルは「はい、ここにおります」と言った。

1Sa 3:17 エリは言った。「主がおまえに語られたことばは、何だったのか。私に隠さないでくれ。もし、主がおまえに語られたことばの一つでも私に隠すなら、神がおまえを幾重にも罰せられるように。」

(1) エリは、サムエルが預言者であることを認めた。

①従順に【主】のことばに従おうとした。

②預言者は正確に【主】のことばを語るべきだということを教えた。

③エリは、サムエルを誓約の下に置いた。

3. 18 節

1Sa 3:18 サムエルは、すべてのことをエリに知らせて、何も隠さなかった。エリは言った。「その方は【主】だ。主が御目にかなうことをなさるように。」

(1) サムエルは、包み隠さず【主】のことばを伝えた。

①預言者としての最初のことばは、自分の師に対する裁きであった。

(2) エリは、【主】の裁きを当然のこととして受け入れた。

①【主】はアロンの息子（ナダブとアビフ）を裁かれた（レビ 10 章）。

②エリの息子（ホフニとピネハス）を見逃すはずはない。

4. 19～20 節

1Sa 3:19 サムエルは成長した。【主】は彼とともにおられ、彼のことばを一つも地に落とすことはなかった。

1Sa 3:20 全イスラエルは、ダンからベエル・シェバに至るまで、サムエルが【主】の預言者として堅く立てられたことを知った。

(1) サムエルは成長した。

①彼のことばは、ことごとく成就した。

②「一つも地に落とすことはなかった」は、弓矢から取られた比喩である。

③サムエルが【主】の預言者であることが証明された。

(2) 「ダンからベエル・シェバに至るまで」

①イスラエル全土を指す慣用句である（約 250km）。

②全イスラエルが、サムエルが預言者として堅く立てられたことを知った。

5. 21 節

1Sa 3:21 【主】は再びシロで現れた。【主】はシロで【主】のことばによって、サムエルに自分を現されたのである。

(1) 祭司を通して啓示が与えられる時代は過ぎ去りつつあった。

①預言者を通して啓示が与えられる時代が始まりつつあった。

結論：今日の信者への適用

1. 神は罪を見過ごされない。

(1) エリの家への裁きは、神の聖さを示している。

(2) エリは、息子たちの罪を知らながら放置した。

(3) 今日の教会への警鐘

①罪を軽く見る風潮

②聖書の基準を曖昧にする傾向

③愛の名の下に罪を放置する姿勢

(4) 神は今も聖なるお方である。

2. 神のしもべは人気よりも真理を優先すべきである。

- (1) サムエルに与えられた最初のメッセージは、師であるエリへの裁きであった。
- (2) 人間的には語りたくない内容である。
- (3) しかしサムエルは、すべてのことをエリに知らせて、何も隠さなかった。
- (4) 今日の牧師や教師にも同じ原則が当てはまる。
 - ①聞きやすいことだけを語るのではない。
 - ②人を喜ばせるために聖書を曲げない。
 - ③神が語られたことをそのまま伝える。

3. 信者は語ることばに責任を持つべきである。

- (1) 預言者だけでなく、すべての信者は神のことばを委ねられている。
- (2) 聖書を教えるとき、証しをするとき、助言をするとき、注意が必要である。
- (3) 自分の意見と神のことばを混同してはならない。
- (4) 「私はこう思う」ではなく、「神はこう語っておられる」という視点を持つ。

4. 神は、忠実な奉仕者を用いられる。

- (1) 忠実な奉仕者に与えられる祝福は、「【主】は彼とともにおられた」である。
- (2) 「【主】よ、お話してください。しもべは聞いております」という姿勢を持つ。

サムエル記第一 (8)

「イスラエルの迷信」

1 サム 4 : 1～11

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1～9 章)

A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)

B. ハンナの賛歌 (2 : 1～10)

C. シロでの霊的状况 (2 : 11～36)

D. サムエルの召し (3 章)

E. 契約の箱 (4～7 章)

1. 略奪された契約の箱 (4 章)

(1) イスラエルの迷信 (4 : 1～11)

(2) 神の栄光が去った日 (4 : 12～22)

2. 注目すべき点

(1) 士師記の時代の末期、イスラエルは政治的にも霊的にも、混乱状態にあった。

(2) サムエルが預言者として召される。

(3) 契約の箱がペリシテ人によって略奪される。

命題：神は、私たちの都合のために利用できるお方ではない。

この箇所を 3 区分して学ぶと、それが分かる。

I. 敗北の原因を見誤ったイスラエル (1～3 節)

1. 1～2 節

1Sa 4:1 サムエルのことばが全イスラエルに行き渡ったころ、イスラエルはペリシテ人に対する戦いのために出て行き、エベン・エゼルのあたりに陣を敷いた。一方、ペリシテ人はアフェクに陣を敷いた。

1Sa 4:2 ペリシテ人はイスラエルを迎え撃つ陣備えをした。戦いが広がると、イスラエルはペリシテ人に打ち負かされ、約四千人が野の戦場で打ち殺された。

(1) 「サムエルのことばが全イスラエルに行き渡ったころ、」

①このことばは、3 章の最後に置かれるべきものである。

②でないと、ペリシテ人との戦いをサムエルが指導したかのように読める。

③4 章の出来事は、サムエルがまだ青年であった頃に起こった。

④これ以降サムエルは 7 章 3 節まで全く登場しない。

(2) 当時、イスラエルはペリシテ人と戦っていた。

①士師時代の終り頃、イスラエルにとっての最大の敵はペリシテ人であった。

*サムソンもペリシテ人と戦った (士 13~16)。

②ペリシテ人はセム系の民族ではない。エーゲ海付近からの移住民。

③海岸地帯に 5 大都市を築いた。

*ガザ、アシュケロン、エクロン、ガテ、アシュドデ

④文明が進んだ海洋民族であり、鉄器を有していた。

⑤彼らの偶像神はダゴンであった。

*上半身は人間で下半身は魚

*ダゴンは、本来メソポタミアの豊穡神である。

(3) ペリシテ人は、アフЕКに陣を敷いた。

①アフЕКは、シロから約 40km 西に位置する。

②イスラエル人は打ち負かされた。

③約 4,000 人が打ち殺された。

3. 3 節

1Sa 4:3 兵が陣営に戻って来たとき、イスラエルの長老たちは言った。「どうして【主】は、今日、ペリシテ人の前でわれわれを打たれたのだろうか。シロから【主】の契約の箱をわれわれのところに持って来よう。そうすれば、その箱がわれわれの間に来て、われわれを敵の手から救うだろう。」

(1) 兵は陣営に戻って来た。

①長老たち（年長者たち）は、敗北に驚いた。

②勝てると思っていたからである。

(2) 彼らは敗北の原因を見誤った。

①自らの罪を顧みることはなかった。

②【主】の臨在がなかったので負けたと考えた。

(3) 契約の箱があれば勝利すると考えた。

①契約の箱が戦場にあれば、【主】が助けてくださるだろうと考えた。

②契約の箱が有効であるためには、民の従順と【主】の導きが必要である。

(4) 契約の箱

①【主】の臨在の象徴である。

- ②十戒が書かれた石の板が 2 枚（シナイ契約の本質）
- ③「宥めの蓋」（贖いのふた）（神との交わりを可能にした）
- ④十字架が新しい契約の象徴であるのに似ている。
- ⑤今も、十字架をお守りか飾りのように扱う人がある。

II. 契約の箱をお守りにしたイスラエル（4～9 節）

1. 4 節

1Sa 4:4 兵たちはシロに人を送り、そこから、ケルビムに座しておられる万軍の【主】の契約の箱を担いで来させた。そこに、神の契約の箱とともに、エリの二人の息子、ホフニとピネハスがいた。

(1) 兵たちはシロに人を送った。

- ①陣営とシロの間の連絡網は生きていた。

(2) シロから戦場まで契約の箱が運ばれてきた。

- ①「ケルビムに座しておられる」
- ②【主】はイスラエルの王であることが示されている。
- ③エリコの戦いでは、契約の箱は重要な働きをした。
*当時、民は【主】を信頼していた。
- ④士師の時代に、イスラエル人の信仰は形骸化した（異教の影響）。
- ⑤彼らは、ささげ物によって【主】からの助けを得られると考えた。

(3) エリの二人の息子、ホフニとピネハスがいた。

- ①契約の箱の運び方は律法に適っていたのであろう。
- ②しかし、墮落した祭司たちの存在は、勝利ではなく敗北を示唆している。

2. 5～9 節

1Sa 4:5 【主】の契約の箱が陣営に来たとき、全イスラエルは大歓声をあげた。それで地はどよめいた。

1Sa 4:6 ペリシテ人はその歓声を聞いて、「ヘブル人の陣営の、あの大歓声は何だろう」と言った。そして【主】の箱が陣営に来たと知ったとき、

1Sa 4:7 ペリシテ人は恐れて、「神が陣営に来た」と言った。そして言った。「ああ、困ったことだ。今までに、こんなことはなかった。

1Sa 4:8 ああ、困ったことだ。だれがこの力ある神々の手から、われわれを救い出してくれるだろうか。これは、荒野で、ありとあらゆる災害をもってエジプトを打った神々だ。

1Sa 4:9 さあ、ペリシテ人よ。奮い立て。男らしくふるまえ。そうでないと、ヘブル人がおま

えたちに仕えたように、おまえたちがヘブル人に仕えるようになる。男らしくふるまって戦え。」

(1) イスラエル人は大歓声を上げた。

①エリコの戦いを再現した (ヨシ 6 : 20)。

(2) ペリシテ人は恐れた。

①ラハブは、エリコの住民は【主】を恐れていると言った (ヨシ 2 : 9~11)。

III. 神の裁きを受けたイスラエル (10~11 節)

1. 10 節

1Sa 4:10 こうしてペリシテ人は戦った。イスラエルは打ち負かされ、それぞれ自分たちの天幕に逃げ、非常に大きな打撃となった。イスラエルの歩兵三万人が倒れた。

(1) イスラエルは大敗した。

①契約の箱は勝利をもたらさなかった。

②敗北の原因は、罪にあった。

③イスラエルはアイでの戦いに敗れた (ヨシ 7 : 11)。

④敗北の原因は、アカンの罪にあった。

(2) 歩兵三万人が倒れた。

①イスラエル兵は、四方八方に逃げた。

②統率がなくなった軍隊は弱い。

③イスラエルには騎兵も戦車もなかった。

④歩兵三万人とは驚くべき数である。

2. 11 節

1Sa 4:11 神の箱は奪われ、エリの二人の息子、ホフニとピネハスは死んだ。

(1) 神の箱は奪われた。

①【主】の臨在は去っていた。

(2) ホフニとピネハスは死んだ。

①無名の預言者の預言どおりである (2 : 34)。

結論：今日の信者への適用

1. 信仰を「神との関係」ではなく「結果を得る手段」にしてはならない。

(1) イスラエルは契約の箱を持ち出せば勝てると思った。

- (2) しかし、彼らが求めていたのは神ご自身ではなく、「勝利」という結果だった。
- (3) 今日の信者も同じ誘惑に直面する。
- (4) 信仰生活の中心は、「神から何をいただくか」ではなく、「神ご自身を愛すること」。
- (5) 詩 27 : 4

Psa 27:4 私は一つのことを【主】に願った。／私はそれを求めている。／私のいのちの日の限り、【主】の家に住むことを。／【主】の麗しさを仰ぎ見、／その宮で、思いにふける、そのために。

2. 問題の原因を外側に求める前に、自分自身を吟味する。

- (1) 長老たちは、「どうして主はわれわれを打たれたのだろうか」と語った。
- (2) しかし彼らは悔い改めなかった。
- (3) 彼らは罪の問題を見ようとせず、契約の箱という「外的対策」に走った。
- (4) 私たちも、何か問題が起こると、外に原因を求めやすい。
 - ①教会が悪い
 - ②社会が悪い
 - ③政治が悪い
 - ④家族が悪い
 - ⑤環境が悪い
- (5) まず、自分を吟味しよう。
- (6) リバイバルは他人の悔い改めからではなく、自分自身の悔い改めから始まる。

3. 外面的な宗教よりも内面的な従順を重んじよう。

- (1) 契約の箱は本来、神の臨在の象徴であった。
- (2) しかしイスラエルは、それをお守りのように扱った。
- (3) 今日でも同じ危険がある。
- (4) 宗教が私たちを守るのではない。
- (5) サムエル 15 : 22

1Sa 15:22 するとサムエルは言った。／「主は【主】の御声に聞き従うことほどに、／全焼のいけにえや、その他のいけにえを／喜ばれるだろうか。／見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、／耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。

- (6) 神は宗教的行為そのものではなく、従順な心をご覧になる。
- (7) 私たちは、神の栄光のために生きる者として召されている。

サムエル記第一 (9)

「神の栄光が去った日」

1 サム 4 : 12~22

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1~9 章)

A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)

B. ハンナの賛歌 (2 : 1~10)

C. シロでの霊的状况 (2 : 11~36)

D. サムエルの召し (3 章)

E. 契約の箱 (4~7 章)

1. 奪われた契約の箱 (4 章)

(1) イスラエルの迷信 (4 : 1~11)

(2) 神の栄光が去った日 (4 : 12~22)

2. 注目すべき点

(1) 士師記の時代の末期、イスラエルは政治的にも霊的にも、混乱状態にあった。

(2) サムエルが預言者として召される。

(3) 契約の箱がペリシテ人によって略奪される。

命題：神の栄光が失われることこそ、人生最大の悲劇である。

この箇所を 2 区分して学ぶと、それが分かる。

I. エリの反応 (12~18 節)

1. 12 節

1Sa 4:12 一人のベニヤミン人が戦場から走って来て、その日シロに着いた。衣は裂け、頭には土をかぶっていた。

(1) 非常に生々しい表現である。

①目撃者情報であるに違いない。

②恐らくサムエルであろう。

(2) 一人のベニヤミン人が戦場から走って来た。

①古代においては、長距離を走る伝令は重宝された。

②彼は、その日の夕刻にはシロに着いた。

③裂けた衣や頭にかぶった土は、悲報を暗示している。

2. 13 節

1Sa 4:13 彼が着いたとき、エリはちょうど、道のそばの椅子に座って見張っていた。神の箱のことを気遣っていたからであった。この男が町に入って来て報告すると、町中こぞって泣き叫んだ。

(1) エリは門のそばの椅子に座って見張っていた。

①大祭司の座が見晴らしのよい場所に移動させられていたのであろう。

②エリは、神の箱のことを気遣っていた。

③恐らく、神の箱を戦場に運ぶことに同意していなかったのであろう。

(2) 伝令は町に入って来て報告した。

①町中こぞって泣き叫んだ。

3. 14～15 節

1Sa 4:14 エリがこの泣き叫ぶ声を聞いて、「この騒々しい声は何だ」と言うと、男は大急ぎでやって来てエリに知らせた。

1Sa 4:15 エリは九十八歳で、その目はこわばり、何も見えなくなっていた。

(1) エリは泣き叫ぶ声を聞いて、何が起きているのかを知りたがった。

①伝令は、レビ人に導かれて大祭司エリのもとに大急ぎでやって来た。

②そして、戦況を報告した。

(2) エリの状態

①98 歳

②目が見えなくなっていた。

4. 16～17 節

1Sa 4:16 男はエリに言った。「私は戦場から来た者です。私は、今日、戦場から逃げて来ました。」するとエリは「わが子よ、状況はどうなっているのか」と言った。

1Sa 4:17 知らせを持って来た者は答えて言った。「イスラエルはペリシテ人の前から逃げ、兵のうちに打ち殺された者が多く出ました。それに、あなたの二人のご子息、ホフニとピネハスも死に、神の箱は奪われました。」

(1) 伝令の不吉なことば

①私は戦場から来た者です。

②今日、戦場から逃げてきました。

(2) エリは惨事を予想し、「状況はどうなっているのか」と問うた。

(3) 伝令は、悲報を積み重ねていった。

- ①イスラエルはペリシテ人の前から逃げた。
- ②兵のうちに打ち殺され者が多く出た。
- ③あなたの二人のご子息、ホフニとピネハスも死んだ。
- ④神の箱は奪われた。

5. 18 節

1Sa 4:18 彼が神の箱のことを告げたとき、エリはその椅子から門のそばにあおむけに倒れ、首を折って死んだ。年寄りで、からだが重かったからである。エリは四十年間、イスラエルをさばいた。

(1) エリは、大祭司の椅子から門のそばにあおむけに倒れた。

- ①悲報①～③までは耐えられた。
- ②悲報④には耐えられなかった。
- ③彼は、首を折って死んだ。

(2) エリは、40 年間イスラエルをさばいた。

- ①彼は忠実に自らの使命を果たした。
- ②二人の息子を甘やかしたことが、彼の人生の汚点となった。

II. ピネハスの妻の反応 (19～22 節)

1. 19 節

1Sa 4:19 彼の嫁、ピネハスの妻は身ごもっていて出産間近であったが、神の箱が奪われて、しゅうとと夫が死んだという知らせを聞いたとき、陣痛が起こり、身をかがめて子を産んだ。

(1) ピネハスの妻

- ①身ごもっていて出産間近であった。
- ②神の箱が奪われて、しゅうとと夫が死んだという知らせを聞いた。
- ③陣痛が起こり、身をかがめて子を産んだ。
- ④ヨセフスによれば、7 か月の早産であった。

2. 20 節

1Sa 4:20 彼女は死にかけていて、彼女の世話をしていた女たちが「恐れることはありません。男の子が生まれましたから」と言ったが、彼女は答えもせず、気にも留めなかった。

(1) ピネハスの妻も死んだ。

- ①世話をしていた女たちは、彼女を励まそうとした。

②「男の子が生まれました」

③個人的な喜びは、国家的な悲劇を癒やすことはできなかった。

3. 21～22 節

1Sa 4:21 彼女は、「栄光がイスラエルから去った」と言って、その子をイ・カボデと名づけた。
これは、神の箱が奪われたこと、また、しゅうとと夫のことを指したのであった。

1Sa 4:22 彼女は言った。「栄光はイスラエルから去った。神の箱が奪われたから。」

(1) 彼女の最後のことば

①「栄光がイスラエルから去った」

②その子をイ・カボデと名づけた。

*「栄光はどこに」という意味である。

(2) エリ家の中にもなお神の栄光を重んじる心が残されていた。

①ピネハスの妻はエリ家の最後の証人である。

②「イスラエル最大の悲劇は敗戦ではなく、神の栄光が去ったことである」

(3) 「神の栄光が去った」の意味

①神がいなくなったのではない。

②神の契約が破棄されたのでもない。

③神の祝福と臨在が取り去られた。

結論：今日の信者への適用

1. 私たちは何を最も悲しむ人なのか

(1) エリは息子たちの死の知らせよりも、「神の箱が奪われた」という知らせに衝撃を受けた。

(2) ピネハスの妻もまた、夫の死や自らの死よりも、「神の栄光が去った」ことを悲しんだ。

(3) 私たちはどうか。

①健康を失うこと

②財産を失うこと

③地位や名誉を失うこと

④人間関係を失うこと

(4) それ以上に悲しむべきことがある。

①神との親しい交わりが失われること

②神への愛が冷えること

③神を礼拝する喜びが薄れること

(5) 詩 51 : 11

Psa 51:11 私を あなたの御前から投げ捨てず／あなたの聖なる御霊を／私から取り去らないでください。

2. 形式だけの信仰は神の栄光を現さない

(1) イスラエルは契約の箱を戦場に運んだが、神ご自身を求めてはいなかった。

(2) 今日でも、外面的な行為だけで満足してしまう危険がある。

①礼拝に出席している

②奉仕をしている

③聖書を読んでいる

(3) しかし神は、形式ではなく心を見られる。

3. 神の栄光を第一とする人生を歩む

(1) ピネハスの妻は死の間際に「イ・カボデ」と名づけた。

(2) 彼女は国家の敗北ではなく、神の栄光が失われたことを最大の悲劇と見た。

(3) 新約時代の信者は、さらに大きな恵みを与えられている。

(4) 信者は聖霊の宮であり、神の栄光を現すために召されている (1 コリ 6:19~20)。

(5) 信者は日々、自問すべきである。

①この選択は神の栄光を現すか。

②この言葉は神の栄光を現すか。

③この奉仕は神の栄光を現すか。

サムエル記第一 (10)

「契約の箱の力」

1 サム 5 : 1~12

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1~9 章)

- A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)
- B. ハンナの賛歌 (2 : 1~10)
- C. シロでの霊的状况 (2 : 11~36)
- D. サムエルの召し (3 章)
- E. 契約の箱 (4~7 章)
 - 1. 奪われた契約の箱 (4 章)
 - 2. 契約の箱の力 (5 章)

2. 注目すべき点

- (1) 契約の箱がペリシテ人によって略奪された。
- (2) イスラエルは「神の栄光が去った」と理解した。
- (3) 契約の箱は、ペリシテの地で力を発揮する。

命題：【主】はご自身の栄光を守られる。

この箇所を 4 区分して学ぶと、それが分かる。

I. ダゴンの敗北 (1~5 節)

1. 1~2 節

1Sa 5:1 ペリシテ人は神の箱を奪って、エベン・エゼルからアシュドデまで運んで来た。

1Sa 5:2 それからペリシテ人は神の箱を取り、ダゴンの神殿に運んで来て、ダゴンの傍らに置いた。

(1) 歴史的背景 (詩 78 : 60~64, エレ 7 : 12, 26 : 9)

- ①ペリシテ人は、アフェクからシロに侵攻し、町を破壊した。
- ②特に、契約の箱を戦場に持ち込んだ祭司階級が厳しく処罰された。
- ③サムエルがどのように奉仕をしたかは、書かれていない。

(2) ペリシテ人の信仰

- ①多神教であるが、主神はダゴンである。
- ②ダゴンは、雨を降らせ、収穫を与える神である。
- ③礼拝する偶像神が多いほど、ご利益は大きいと信じていた。

④神の箱(契約の箱)をペリシテの地に運んできたのはそういう理由からである。

(3) 彼らは、神の箱をエベン・エゼルからアシュドデまで運んできた。

①そして、それをダゴンの傍らに置いた。

②ペリシテ人の神の優位性を示すためであった。

2. 3～4 節

1Sa 5:3 アシュドデの人たちが、翌日、朝早く起きて見ると、なんと、ダゴンは【主】の箱の前に、地にうつぶせになって倒れていた。そこで彼らはダゴンを取り、元の場所に戻した。

1Sa 5:4 次の日、朝早く彼らが起きて見ると、やはり、ダゴンは【主】の箱の前に、地にうつぶせになって倒れていた。ダゴンの頭と両手は切り離されて敷居のところにあり、胴体だけがそこに残っていた。

(1) 翌朝に起きた異変

①ダゴンが契約の箱を礼拝するような位置に倒れていた。

②ダゴンは、【主】の前に屈したのである。

③しかし、ダゴンの宮の祭司たちは、それを偶然に出来事と解釈した。

④そして、ダゴンを元の場所に戻した。

⑤恐らく、盗人が侵入しないように警戒を強めたと思われる。

(2) さらにその翌朝に起きた出来事

①前日と同じように、ダゴンは契約の箱の前に、うつぶせになって倒れていた。

②さらに、頭と両手は切り離されて敷居のところにあった。

③像が倒壊して頭と両手がばらばらになったわけではない。

④誰かが意図的に切断したのである。

⑤敷居のところに置いたのは、侮辱的行為である。

⑥宮に入る者は、敷居を踏んで中に入る。

⑦ダゴンは、理性（頭）と行動力（両手）を欠いた無力な偶像である。

3. 5 節

1Sa 5:5 それで今日に至るまで、ダゴンの祭司たちやダゴンの神殿に入る者はみな、アシュドデにあるダゴンの敷居を踏まない。

(1) 奇妙な習慣が生まれた。

①「今日に至るまで」ということばは、この記録の信頼性を証明している。

②ダゴンの宮の入る者はみな、敷居を踏まないようになった。

③彼らは、依然としてダゴンを主神として敬っている。

④ゼパ 1 : 9 (ペリシテ人の習慣を真似る者がいたのであろう s)

Zep 1:9 その日、わたしは罰する。／すべて神殿の敷居を跳び越える者、／主人の家を暴虐と欺きで満たす者どもを。

II. アシュドデへの裁き (6～8 節)

1. 6 節

1Sa 5:6 【主】の手はアシュドデの人たちの上に重くのしかかり、アシュドデとその地域の人たちを腫物で打って脅かした。

(1) ペリシテ人たちは、学んだ教訓をすぐに実行に移さなかった。

①それゆえ、【主】はアシュドデへの裁きを実行される。

②人々は、腫物（疫病）で打たれた。

③今日の人たちも、悲劇が起こるまで行動に移そうとしない。

2. 7 節

1Sa 5:7 アシュドデの人たちは、この有様を見て言った。「イスラエルの神の箱は、われわれのもとにとどまってはならない。その手は、われわれとわれわれの神ダゴンの上に厳しいものであるから。」

(1) 腫物は激しい痛みといのちの危険をもたらした。

①アシュドデの人々は、事の経緯を見て結論を出した。

②イスラエルの神の箱を町から遠ざける必要がある。

③「その手」とは、【主】の力のことである。

3. 8 節

1Sa 5:8 それで彼らは人を遣わして、ペリシテ人の領主を全員そこに集め、「イスラエルの神の箱をどうしたらよいでしょうか」と言った。領主たちは「イスラエルの神の箱は、ガテに移るようにせよ」と言った。そこで彼らはイスラエルの神の箱を移した。

(1) ペリシテ人の領主 (5 大都市の領主) が集められた。

①契約の箱の処置について議論した。

②契約の箱をガテに移すことにした。

③この案は、問題解決にはならず、より問題を大きくした。

III. ガテへの裁き (9 節)

1. 9 節

1Sa 5:9 それがガテに移された後、【主】の手はこの町に下り、非常に大きな恐慌を引き起こし、この町の人々を上の方も下の者もみな打ったので、彼らに腫物ができた。

(1) ガテは、アシュドデから約 20km 南東の町（イスラエルに近づく）。

- ①この町でも同じことが起こった。
- ②子どもから大人まで、【主】の手が下った。
- ③彼らに腫物ができた。
- ④非常に大きな恐慌を引き起こした。

IV. エクロンへの裁き (10~12 節)

1. 10 節

1Sa 5:10 ガテの人たちは神の箱をエクロンに送った。神の箱がエクロンにやって来たとき、エクロンの人たちは大声で叫んで言った。「私と私の民を殺すために、イスラエルの神の箱をこっちに回して来たのだ。」

(1) 契約の箱はエクロンに送られた。

- ①契約の箱よりも噂の方が先にエクロンに届いていた。
- ②エクロンの住民たちは、激しく抗議した。
- ③「私と私の民を殺すために、イスラエルの神の箱をこっちに回して来たのだ」

2. 11~12 節

1Sa 5:11 それで彼らは人を遣わして、ペリシテ人の領主を全員集め、「イスラエルの神の箱を送って、元の場所に戻っていただきましょう。私と私の民を殺すことがないように」と言った。町中に死の恐慌があったのである。神の手は、そこに非常に重くのしかかっていた。

1Sa 5:12 死ななかった者は腫物で打たれ、助けを求める町の叫び声は天にまで上った。

(1) ペリシテ人の領主たちが再び集められた。

- ①契約の箱の最終的解決は、イスラエルの地に戻すことである。
- ②町中にあった死の恐怖は非常に大きかった。

(2) エクロンの住民の叫び声は、天にまで届いた。

- ①それほど大きな叫び声であった。

結論：今日の信者への適用

1. 神はご自分を守るために私たちを必要とはしておられない

- (1) イスラエルは契約の箱を戦場に持ち込み、「神の力を利用しよう」とした。
- (2) しかし敗北した。
- (3) 5 章では、神はご自身の力だけでダゴンを打ち倒した。
- (4) ここには私たちへの警告がある。
 - ①自分が教会を支えている。

- ②自分が奉仕を守っている。
- ③自分が神の働きを成功させている。
- (5) 私たちは、神の働きの主人ではなく、しもべである。

2. 偶像は今も人の心を支配しようとしている

- (1) ダゴンは頭と両手を失った。
- (2) 偶像には考える力も行動する力もない。
- (3) 現代人の偶像
 - ①お金
 - ②地位
 - ③成功
 - ④健康
 - ⑤趣味
 - ⑥自己実現
- (4) 主はダゴンを倒されたように、私たちの心の偶像をも倒そうとされる。

3. 神の警告を軽視してはならない

- (1) アシュドデは警告を受けた。
- (2) しかし悔い改める代わりに、契約の箱をガテへ送った。
- (3) ガテも同じであった。さらにエクロンへ送った。
- (4) 彼らは問題を解決しようとはせず、問題を移動させただけであった。
- (5) 私たちも、罪の処理を先延ばしにしてはならない。

4. 神の栄光は必ず現される

- (1) 5 章にはイスラエル人が一人も登場しない。
- (2) イスラエルは敗北した。
 - ①エリは死に、
 - ②ホフニとピネハスも死に、
 - ③契約の箱は奪われた。
- (3) しかし実際には、神は少しも敗北していなかった。
- (4) 主はご自身の時に、ご自身の方法で、ご自身の栄光を現される。
- (5) 状況ではなく、主権者なる神を見上げよう。